

朝

もともと浅い眠りであったのだろう、私はドアが軽くノックされたその瞬間に目を覚ました。昨夜、閉め忘れたのであるカーテンの隙間から、朝日が差し込み、窓の外からは朝の音に相応しい小鳥の鳴声が微かに聞えていた。

昨夜のあの母屋での出来事が無ければ、この典型的とも言える清々しい朝の雰囲気は私は楽しんだであろう、しかし目覚めた瞬間に脳裏に去来したのは、昨夜の彰子と雅美の痴態であり、ベッドの横の机の下に丸められた、精液にまみれている私の下着の事だった。

遠慮がちなノックに続いて、雅美の遠慮がちな声が、ドア越しに聞えてくる。

「お目覚めですか？ もう少して朝食のご用意が整いますが……」

私はベッドから起上がり、喉の強ばりをほぐすために軽く咳払いをしてから答える。

「はい……。すぐに参りますので」

少しの躊躇の後、ドアの向こうから雅美が答える。

「よろしければ……朝食、お部屋の方にお持ちしますが？」

一瞬、私はその提案に誘惑を感じる。しかし私の口から出た言葉は違ったものだった。

「いえ……。食堂に参ります」

ドアの向こうの雅美が先ほどの時よりもほんの僅かだけ長い時間躊躇し、そして返事を返す。

「はい、ではお待ちしておりますので……」

ベッドから出た時、雅美の遠ざかる足音が聞えて来た。



母屋の食堂へとつづく扉を開けたとたんに、私は香ばしい焼きたてのパンの匂いに包まれた。

広く、たつぷりと余裕をとって作られたその食堂には、中央に年代ものらしい、どっしりとしたテーブルが据えられており、三脚の椅子が、そこに座る者を待つかのように、後ろに引かれた

格好で並んでいた。

テーブルの上には、控え目な装飾を施したシャンデリアが下がり、正面の大きな窓には、朝の微風に揺れるレースのカーテンが引かっている。

食堂はそのカーテン越しに差し込む柔らかな朝の陽に満ちており、そして、食器棚を兼ねる仕切りの向こうからは、豊潤な紅茶の香りとの立ち働く気配が伝わって来る。

私はドアの前方にあった椅子の一つに腰を下ろし、仕切りの向こうの台所で食事の用意を整えている雅美の姿を見詰める。

私に背を向けた彼女は、昨日と同様のメイドの服を着けていた。私の視線は、知らず知らずのうちに、紺色のスカートに包まれた彼女の腰と尻に向けられ、揺れるその動きを追っていた。

あのスカートは昨夜と同じものなのだろうか？

ふと、そんな疑問が湧きあがり、それによって連想されたのか、私の想像の視野の中に、昨夜の雅美の痴態が鮮明に浮び上がる。

彰子によってスカートを捲くり上げられ、下穿きを取り去られ、その奥の、女の最も秘めた箇所を剥き出しにされていた姿が。尻に鞭を受け、秘部から女の蜜を止めなく流し、欲情にまみれ、すすり泣いていた雅美の姿が。そして、尻に硝子の棒を差し込まれ、呆けたような快樂の表情を浮べ、涙と涎を垂れ流していた彼女の表情が。

私の中で暗い欲望が頭をもたげる。このまま席を立ち、台所で立働く彼女を背後から襲い、床にねじ伏せ、尻を引裂くように荒々しく犯す自分の姿を想像する。その想像が私の下腹部で固く、一つの形を成し始める。

「おはようございます」

その声は背後から突然に聞えた。

欲望が、始ったときと同様に急激に消えうせ、私は、雅美から視線を逸らす。

声の主は勿論、彰子であった。私が背にしたドアから食堂に入ってきた彼女は、丈の長い昨夜とは別のバスローブを身に着けていた。

微かな香水の匂いを漂わせながら、彰子が私に薄い微笑みを向ける。

その笑みによって私は、雅美に向けていた視線を彼女に悟られてしまった事に気付く。

彰子が私の正面の席に付き、目を向けてくる。表情は微笑みを湛えたままであったが、視線はそれを裏切っていた。

「昨夜はよくお休みになれましたか……？」

私の脳裏に一瞬、母屋での光景が過る。

「……はい。ぐっすりと……」

「そうですか、それは良かったですね。慣れないお部屋で寝付かれなかったらどうしようかと心配しておりましたのよ」

「いや、こちらこそ、いろいろご用意して頂きまして……」

「そうそう、あのお部屋、気に入ってもらえましたかしら？ あの前回の部屋は、主人が生前に書斎として使っていたものですよ……」

その彰子の言葉に、私は軽い驚きを感じる。

曖昧な笑みで答える私に彼女が言葉を続ける。

「貴方も主人のように、あの部屋で御研究の成果を上げられると私も嬉しいですね」

「努力、致します……」

私にはそう答える以外の言葉は無く、軽く頭を下げる。

食堂の中に、雅美が台所から運んできた紅茶の香りが漂う。

「洋食でよろしかったかしら？」

彰子が、テーブルの上に乗った三人分のティカップと取り皿、クロワッサンを盛った籐の籠煎卵料理を示しながら、私に問いかける。

「はい。先程からの良い匂いに空腹を感じていました」

「よかったわ……」

微笑みが深くなる。

「それと、雅美も同席いたしますので……。食事は人数が多い方が楽しいとは思いませんか？」

「はい、確かにそうですね、歓迎致します」

私が料理を並べ終わった雅美に視線を向けると、彼女が微笑みを返してきた。しかし私はその微笑みの中に、何処か強ばったものがあることを見て取っていた。

「では、いただきますでしょうか」

雅美が、私と彰子の間の席につくと彰子が言った。

新鮮なバターと上質の酵母をたっぷりを使い焼き上げたクロワッサンは、まだ熱い程であり、濃厚な牛乳を入れたミルクティは豊潤な香りを漂わせ、軽い塩味と粒胡椒で調理された煎卵はしつとりとした舌ざわりであった。

私はその簡素ではあるが贅沢な朝食を楽しみ、自分がいかに空腹であったかを実感する。

私が三つ目になるクロワッサンに、自家製のものらしい苺ジャムを塗付けて頬張った時、台所への仕切りの向こうから黒猫のエンプーサが現れた。

私は一瞬食事を忘れ、エンプーサに目を奪われる。

黒猫はそんな私にちらりと視線を向け、そして私を無視するかのように彰子の膝の上に飛び上

がった。

彰子がエンプーサに微笑みかけ、そのビロードのように光沢のある毛皮を撫ぜ、喉の辺りをくすぐる。

エンプーサが目を細め、喉を鳴らす。

彰子が半ば私に、半ばエンプーサに語りかけ始めた。

「このこは寂しがりやでしてね……。あなたにはさつきミルクを上げたでしょうに、まだ足りないの?」

エンプーサの毛皮を撫でる手を止めて、彰子が取皿の上に乗った一欠片のバターを手のひらに取り、エンプーサの前に差し出すと、その匂いを嗅ぎ取ったエンプーサが舌を伸ばし、舐め始める。

彰子は、そのエンプーサの仕草を微笑みを浮かべながら見詰めるが、何故かその微笑みには淫らなものが混ざっているように私には思えた。

エンプーサの舌が、彰子の手のひらを舐め上げる。

彰子が微かに、ほんの微かに、喉の奥で声を上げ、そして、ある種の艶を帯びはじめている声で囁く。

「あなたの舌……ざらざらしてるわ……」

彰子の表情がはつきりと淫らさを浮き彫りにしはじめる。

私は半分程になったクロワッサンを取り皿に戻し、その彰子の表情に目を奪われる。

だが、その光景を見詰めていたのは私だけでは無かった。

雅美に目を向けると、彼女は私以上に強く、エンプーサとそしてその舌が舐め上げる彰子の手のひらに向けられていたのだ。

雅美の息遣いが軽く乱れている事に私は気付く。そして彼女は、僅かに開いた唇から舌先を覗かせ、唇を舐める。

椅子がその尻の動きによってか、小さく軋み、脚が寄り合わされる。

私は椅子を引き、立上がる。

その音に彰子が、雅美が、そしてエンプーサが視線を向ける。私は立ち上がった時に初めて、下腹部の強ばりを意識した。

「たいへん結構な朝食でした……。そろそろ部屋に戻りたいと思います」

踵を返そうとした私に向かって、彰子が先ほどのものでは無い、もっと鋭い口調で言う。

「お待ちになって。まだですわ……。まだ、貴方はご覧になっていませんわ」

「見ていない? 何をです?」

彰子は、私のその間を無視し、椅子から立ち上がる。エンプーサがテーブルの上に乗る、私に

視線を向ける。

彰子が深く艶を帯びた微笑を私に向け、歩み寄ってくる。

「恐がっているのですか……貴方？」

私は反射的に、その彰子の問いかけに反発する。

「怖い？ 何がです？」

しかし私は、その言葉を口にした時には既に、答えを知っていた。

立ちすくむ私の一步程前で彰子は立ち止まり、雅美に命ずる。

「雅美、お始め……」

まだ椅子に座ったままの雅美が身をすくませ、小さく首を振る。

「始めなさい、雅美、私は二度言ったわよ」

二度言った。私はその言葉を昨夜聞いていた。再びその彰子の言葉に触発され、昨夜の出来事を思い描く。

素早く、そして深く、衝動が湧きあがっていくのを感じる。

エンプーサがテーブルの上で鳴声を上げた。

雅美はゆっくりと椅子から立上る。その表情はまるで死人のそれのように虚ろだった。

私の傍らに立つ彰子が私に身体を寄せ、私との距離を男と女の距離に縮める。胸板に彼女の手が触れたとき、ぞくりとする寒気にも似た衝撃が身体を突き通っていった。

そんな私の反応を感じ取ったのか、彰子が低く笑い、更に私に身を寄せ、両腕を肩に絡み付かせる。

強く彰子に抱かれた私は、彼女の身体から漂う香水の匂いを吸い込み、その身体の柔らかさと弾力を感じる。

意識しないうちに私の両腕は、彼女の肩を抱いていた。

彰子の太股が、私の脚に密着する。

雅美が、テーブルの上のバターを素手で掴み取った。

彼女は、床に脚を開いた格好で膝を付き、そのバターを握った手をスカートの中に差し入れる。いぶかしげな視線を雅美に向ける私の耳に、彰子が囁きかける。

「あのこ、今朝は下穿きを付けさせていないのよ、何処にバターを塗り付けているとお思い？」  
まるでその言葉に答るかのように雅美が、スカートの上からでもはっきりと解るほどに自分の股間で手を動かし、表情を歪ませ、そして僅かに開いた唇から忙しない息を吐きながら、焦点を失いがちな視線を私に向ける。

彰子が、私の首筋に深く顔を寄せ、その肌を舌を這わしはじめる。

「うっ……」

首筋を這う、柔らかなめめつた感触に私は思わず声を上げる。そして彰子の体臭と香水の匂い。「あのこは好きなのよ……こんな事が……。この屋敷に男の方がいなくなつて久しいわ……。見てあのこの顔、凄く昂ぶっている……」

私が見詰める中、立ち上った雅美がテーブルに尻を乗せ、手を支点にしてその上に乗る。重厚なテーブルは彼女の体重を軽々と受け止め、軋みさえもしなかった。

雅美が両膝を立てて開いた格好でテーブルの上に座り込む。

下肢の間で張り詰めているスカートを彼女はゆっくりとずり上げ始める。

新鮮なバターの匂いが漂いだし、そして体温で溶けたバターで濡れる白い太股が、私の目を射る。

雅美は更にスカートを捲くり上げ、太股の奥までを私の目前にさらけ出す。

先程の彰子の言葉が真実であった事を、私は見て取る。バターに濡れた黒い陰毛が雅美のスカート奥で鈍く光っていた。

雅美が掠れた声で黒猫を呼ぶ。

「エンプーサ……おいで、さあ……」

バターの匂いと雅美の声に誘われたエンプーサが雅美に近づき、そしてその開かれた股間の注進に舌を伸ばす。

エンプーサの真っ赤な舌が、雅美の白くなめらかな太股に触れ、舐め上げた途端、彼女が声にならない溜め息のような声を上げた。その声は、はっきりと彼女の欲望を示していた。

雅美が更に大きく脚を開き、私はその股間の奥に秘められた彼女の陰唇を見る。

エンプーサは雅美の太股を、その奥に向かって舐め上げて行く。

彰子が私の唇を奪う。

舌が差が込まれ、激しく口内を舐め、舌を吸い上げる。そうされながら私は、彰子の腰に手を回し、柔らかな尻を強く力を込めて掴み上げる。

低く、彰子が私の口の中で声を上げた。

エンプーサが雅美の性器を舐め始める。雅美が大きくのけぞらせた首に臍が張り、そしてかみ殺しても漏れる声を彼女があげた。

エンプーサは、雅美の性器の襞に塗りこめられたバターを一心に舐め取り続ける。雅美のは瞳を固く閉じ、切れ切れにの樂の声を上げ始める。

淫らな音が雅美の股間から聞える。時折、全身をビクリと震わせるのはエンプーサの舌先が、彼女が一番敏感な突起に触れた時であった。

彰子が唇を離し、私の耳たぶを軽く噛み、欲情に掠れた声を吹き込んでくる。

「見て、あのこ、凄く喜んでるわ……」

耳から唇を離し、雅美に振り返る。

「雅美、気持ち良いかい？」

雅美が彰子を、そして私を見る。僅かに目の端にたまった涙が光り、息が乱れる。快樂に濁った声が唇から漏れだす。

「は、はい……気持ち……良いです……うん、と、とっても……」

「どこが？」

「……わ、わたしの……わたしの、とっても嫌らしいところ……が」

「どんな感じがするの……教えて？」

そんな会話を交わしながら彰子が、私の股間に手を伸ばし、スポンの上からその中の強ばった物をゆっくりと摩り始める。

「舌が……エンプーサの、舌が、とっても、ざらざらなの……、私の、私の嫌らしいところに舌が当たって……。ああっ！、凄く、気持ちが良いの……、少し痛いけど……それが、それが、とても、気持ち良くて……」

雅美が通常ならば絶対に口にしない事を欲情の酔いの為か、憑かれた者のように話し続ける。そしてその自分の言葉に彼女は更に酔い、昂ぶりを深めて行く。

彼女の言葉は耐え切れなく漏らす快感の声と息遣いに彩られ、私はその彼女の姿に強烈な欲情を覚える。

私の昂ぶりを感じ取ったのか、彰子が私のスポンのベルトを外し、その中に手を差し込んでくる。

人間を墮落させた神話の蛇のように、彰子の手がズボンの中を這い、下着の上から固く勃起した陰茎を掴む。

その途端に沸き上がった快感に、私は低く声を上げる。

「とっても熱くて……固いわ」

彰子が私の勃起した陰茎を握り締め、強く揉むように手を動かす。

「スポンを脱いで……。もつと貴方のものに触れたい」

私はスポンを床に落す。そのスポンを追うように彰子が床に膝を付き、目の前の、その内部で勃起している陰茎の形を浮び上がらせている下着の部分に両手で触れ、その上から手で触れる。

彰子が両手の間に挟みこんだ私の陰茎を擦り上げると、その先端から滲みだした粘液が下着を濡らし、独特の匂いを放つ。

私はその彰子の愛撫に耐え切れなくなるまで待ち、そして下着をずり下げる。

彰子は目の前に突き出された陰茎を両手で握り、上に持ち上げ、陰茎の下の袋に唇を寄せ、その表面に舌を這わしだす。

舌はゆっくりと動き、彰子の手の中で私の昂ぶりが更に激しくなる。

彼女の指が陰茎の先端、亀頭の部分に触れ、尿道とその近くを擦りはじめめる。

彰子の舌と指の感触が、鋭角的で強い快感となり、私の背骨を駆け上る。私の漏らしたうめき声に、彰子が妖艶な微笑を浮かべる。

テーブルの上の雅美が小さく、そして鋭く首を振る。半開きとなった唇からは時折、悲鳴に近い小声が発せられ、無意識のうちにその両手は、自らの乳房を強く揉み始めている。

彰子が私の腰に手を当て、勃起し、目の前で揺れる陰茎の表面に、唇から出した舌を這わす。その淫らな彰子の行為に、更に私は欲情を深め、下腹部で私の陰茎を追う彰子の髪を鷲掴みにし、その頬に亀頭を押し付ける。

彰子の頬に、私の先端から滲みだした透明な粘液が糸を引き鈍く光る。彼女は顔を横に向けて唇で亀頭を捉え、そしてその開いた部分を唇で包み込む。

生暖かく柔らかな舌が、亀頭の表面を這い、吸上げる。彰子が一旦唇を離し、上目使いで私を見上げる。

「男の味の味がしますわ……。主人のものより濃い、男の味ですわ……」

そして彼女は、その言葉が及ぼした影響を確かめるように、私の瞳を覗きこみ、再び亀頭を口を含む。

下腹部で、彰子の顔がゆつくりと前後に揺れ始めた。

雅美がテーブルの上の皿からバターを再度掴み取る。

彼女は、エンプーサを乱暴とも言える手付きで自分の股間から分離し、そして身体を回し、テーブルの上でうつぶせになる。

彼女はそのまま尻を私に向けた格好で膝を立て、尻を大きく掲げる。後ろに回した手でスカートを捲くり上げながら、大きく脚を開いていく。

完全に女の二つの箇所をむき出しにした彼女の尻の表面には、昨夜の鞭の跡が微かな赤い筋となっており、白さの中に彩りを加えていた。

雅美の陰部は溶けたバターと、奥から染みだした愛液にまみれており、濃い桜色に充血した粘膜と陰唇の上端では、固い尖りを見せる陰核がぬめりするような光沢を放っていた。

快楽を待ち受ける腰が揺れるたびに、膣口が股間の筋肉の動きによって微妙に動く。

雅美のバターを掴んだ手が、陰部の上で膣口と同調して蠢いている後孔に伸び、その表面にバターを塗り付け、そして人差し指が第一関節の辺りまで中に潜り込む。

滑るバターに助けられて、後孔に潜り込んだ指が大きく動き、その動きに合わせて翳った肉色の後孔の筋肉が蠢き、膣口からは新たな滴りが滲み出す。

彰子の唇が固く窄められ、私の陰茎の表面を擦り上げた。



舌が亀頭を這い、尿道の窪みを舐め上げる。歯が時折敏感な表面に触れ、その軽い苦痛がよりいっそう快感を高める。

手が垂れ袋を揉むように撫で、深く私をくわえ込んだ唇が、陰茎の生え際に触れる。

雅美が、柔らかくほぐれた後孔から指を抜き、開かれた左右の尻房を両手で掴んで引裂くかのように、自ら大きく割り広げる。

奥の秘肉までを晒け出した雅美の後孔は、その部分までをバターに濡れ光からせており、それは、まるで欲情しきった女の性器のようであった。

テーブルの上のエンプーサが伸び上がり、前足を雅美の尻に掛け、バターが塗られた後孔に舌を伸ばす。

赤い舌が雅美の後孔を舐めはじめ、その感触に彼女が身体を震わせながら、大きく声を上げる。雅美の、尻肉を大きく広げ続ける指の関節が白くなる。

エンプーサによって、その部分を執拗に舐られる雅美の口からは、言葉にならない声が漏れ続ける。

私の下腹部で、彰子が淫らな音を立て始める。

強く私の陰茎を吸ったその唇が、亀頭の表面を擦り上げ、尿道の窪みを刺激する。急速に快感が強まり、射精への衝動が沸き上がる。

テーブルの上の雅美が尻を振り始める。

エンプーサがその揺れに耐えようと、彼女の尻に掛けた前足の爪を出す。それを感じた彼女が更にが腰を強く振り、エンプーサの爪が尻に食い込む苦痛を味わう。

彼女の上げる喘ぎの声が大きくなった。

彼女の片手が尻から離れ、愛液のぬめりによってべっとり濡れた秘部をさすり始めた時、爪が食い込んだ尻の傷から血が流れだし、その血は、三つの赤く細い線となって白い尻を彩る。

私は雅美の血で飾られた尻と、その股間で激しく動く手によって擦られ、形を歪ませる秘部を見る。

下腹部で雅美が私に与えつつける快感以上の、暗く、陰惨な衝動が私の内部から湧きあがり、獣的な情欲となる。

私は彰子の髪を掴んで激しく前後に振り、その喉の奥から、くぐもった苦しげなうめき声を引き出す。

急激な射精の衝動が私を捉える。

雅美が、固く尖り愛液のぬめりにまみれた自分の陰核を摘まみ、捻り上げる。

その苦痛と快感が急激に彼女を快樂の頂点へと押し上げ、悲鳴そのものの声を張り上げさせる。

「あぁっ！」

その瞬間、彼女の膣と後孔が呼応し、蠢き、窄まる。

私は雅美の膣と後孔の淫ら極まり無い動きを見て取り、その瞬間に彰子の口内に射精する。

彰子の唇が私の陰茎を強く締め上げ、射精とその瞬間の快感を長引かせながら、舌の上に飛び散った熱い白濁を受け止め、舐め上げる。

私は苦痛と区別できない快樂を味わい、反射的に彰子の顔を下腹部から引き剥がす。

彰子の唇から白く濁った精液が零れだし、床にしたたる。

淫らな絶頂を食った雅美が、テーブルの上にぐったりと身を横たえる。

その尻から流れ出した血が、太股とテーブルを汚す。

私の前で床に跪いた彰子の喉が鳴り、唇に付着した白濁をその舌が舐め取っていく。

射精後の快感と疲労によって荒い息を吐く私に、彰子が妖艶な微笑みと視線を向ける。

「昼にお部屋に伺いますわ……。今度は私だけで……」

彰子が再び唇を舌で拭う。

テーブルの上で、再びエンプーサが鳴き声を上げた。

以下、次回へ